

格闘技が光をくれた

視野狭まる難病の男性



練習に励む太田さん。「多くの障害者がハンデを克服して、生きる力をつけてほしい」と願う

視野が徐々に狭くなる難病と闘いながら、キックボクシングに打ち込む男性がいる。交野市の太田耕奨さん（30）は、病気で失いかけた自信と生きる力を取り戻し、「スポーツができる喜びを多くの障害者を感じてほしい」と、格闘技教室を主宰するまでになった。

太田さんは2001年、「網膜色素変性症」と診断され、21歳の時に進行性の難病。医師から「失明することもある」と言われた。健康者は180度以上とされる視界は、わずか3度。「ストローで世界を見ている感じ」という。パニック障害を併発し、過呼吸や全身のしびれに何度も襲われた。「生きていく気がしない」状況を変えようと、交野の実家を出て、東京で一人暮らしを始めた。そ

始めた。そして、24歳の時、勤めていたインターネット設備会社の同僚に誘われ、埼玉県川口市でのキックボクシング体験教室に参加したことが、転機となった。講師の格闘技ジム代表・ヒデ三好さん（34）に病気を打ち明けると、「絶対できることはある。負けるな」と励まされた。幼い頃に熱中した少林寺拳法を思い出した。高くけり上げ、拳を素早く突き出す。仲間と汗を流すことが、何より楽しかった。「心がぼろぼろだった」のが、笑顔を取り戻している自分に気付いた。

三好さんは「けりが鋭く練習のたまもの。顔のすぐ近くのものには見えないが、相手選手の体の動きを予測してカバーできるようになった。相手も気を配り、周囲が声をかけて危険を防いでいる」と話す。

障害者向け教室開設

多くの人と一緒に汗を流すことで、苦手だったコミュニケーション力がついてきた。

太田さんは「サークルをNPO法人化し、障害者の格闘技大会も開きたい。やれば何でもできる、という自信をつけてもらえれば」と話す。

関西で開く、次回の格闘技教室「誰でもKICK」は、来年1月31日午後2時から、兵庫県尼崎市の市記念公園総合体育館で。参加無料。

ある」と言われた。健康者は180度以上とされる視界は、わずか3度。「ストローで世界を見ている感じ」という。パニック障害を併発し、過呼吸や全身のしびれに何度も襲われた。「生きていく気がしない」状況を変えようと、交野の実家を出て、東京で一人暮らしを始めた。そして、24歳の時、勤めていたインターネット設備会社の同僚に誘われ、埼玉県川口市でのキックボクシング体験教室に参加したことが、転機となった。講師の格闘技ジム代表・ヒデ三好さん（34）に病気を打ち明けると、「絶対できることはある。負けるな」と励まされた。幼い頃に熱中した少林寺拳法を思い出した。高くけり上げ、拳を素早く突き出す。

仲間と汗を流すことが、何より楽しかった。「心がぼろぼろだった」のが、笑顔を取り戻している自分に気付いた。三好さんは「けりが鋭く練習のたまもの。顔のすぐ近くのものには見えないが、相手選手の体の動きを予測してカバーできるようになった。相手も気を配り、周囲が声をかけて危険を防いでいる」と話す。

関西で開く、次回の格闘技教室「誰でもKICK」は、来年1月31日午後2時から、兵庫県尼崎市の市記念公園総合体育館で。参加無料。